2023年6月18日 佐土原教会礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書4章1～4節
説教題：パンだけではなく

「百万人の福音」に「方言聖句」というページがありますが、家の子供が小さい時、何かの集会で「宮崎弁の主の祈り」をもらって来たことがあります。「主の祈り」の第5の祈りは「我らの日用の糧を今日も与えたまえ―(私達の日毎の食物を今日もお与え下さい)」という祈りです。宮崎弁では「おれたちん、毎日ん食いもんを、いつもくんない」となっていました。そこには「食物を日毎に求めなさい」と勧められています。「神が御手を伸ばして日毎に私達に食物を与えて下さる。それを日毎に受け取りながら生きる」、そのようなイメージを大切にして、1日1日を生きて行く―(とりあえずこの1日を生きて行く)、そういう歩き方も大切ではないかと思ったことです。

しかし「聖書」は、「食物を求めることと同じように大切なことがある」と教えます。それが「人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる」(申命記 8:3)という言葉です。今朝はその御言葉が語られる箇所を学びます。「内容」と「適用」に分けてお話しします。

1：内容～神への依存と信頼を大切にする

前回、イエスは洗礼を受けられました。洗礼の後、4章1節に「イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた」(1)とあります。「悪魔の試みを受けるため」とありますから、直接に誘惑を仕掛けて来たのは悪魔です。しかしすぐ後には「御霊に導かれて荒野に上って行かれた」とあります。つまり、御霊(神様)がイエス様を悪魔と対決させるために荒野に導かれた、ということになります。悪魔はそう思っていないでしょうが、この出来事を背後から支配しておられるのは神様だということです。しかしなぜ、御霊はイエス様を誘惑に遭わせようとされたのでしょうか。どうしてイエス様はこの経験をしなければならなかったのでしょうか。「人生を導く5つの目的」という本の中に次の言葉があります。「人格というものは、試されることによって成長し、真価が問われていきます…神は、日々あなたにふさわしいテストを用意され、あなたがどのように物事に反応するかをご覧になっておられます」(リック・ウォレン)。「人格は、試されることによって成長する」というのです。

およそ30歳になられて伝道の公生涯に立たれたイエス様には、2つの準備がありました。1つは「洗礼」です。「罪人の身代わりとなるために、罪人として洗礼を受ける」、それは、罪人の罪を自分の身に引き受けて死んでしまう、死ぬことによって神の御心を成し遂げる、そのような救い主の在り方を方向付けするものでした。それに続くこの「荒野の誘惑」は、イエス様がその方向に歩み出そうとされる、その「救い主としての在り方」がテストによって確立される、そのような時だったのです。

具体的にはどういうことだったのか。悪魔の第一の誘惑は、40日40夜断食をして空腹でたまらないイエス様に「これらの石がパンになるように命じたらどうか」という誘惑でした。イエス様は、空腹の中でご自分の周りにいる人々のことを思われたはずなのです。イエスの周りに集まって来た人々は、ほとんどが貧しい人々、飢えの中にいる群衆でした。イエス様は、その貧しさを、飢えを思われる。その時に悪魔は言うのです。「あなたがこの世に来た神の子なら、しかも飢えの苦しみを知っておられるなら、なぜこれらの石をパンに変えることが出来ないのか。そのようにして飢えを追放して下されば、どんなに多くの者が救われるであろうか。これこそ人間救済の道ではないか」。そういう誘惑なのです。イエスはこの問いの中に「自分か神の子であるとはどういうことなのか。人を救うとはどういうことなのか」、その根本的な問いを聞いておられ、自問しておられるのです。しかも、飢えという人間にとって最も切実な欠乏の現実を、飢えた人々と共に苦しみながら自問しておられるのです。それは、人を愛して止まないイエス様の愛が揺すぶられるような問いでした。パンを分けて上げることが出来れば、ある意味で人々は救われるでしょう。しかもイエス様は、やろうと思えばお出来になったでしょう。いや、そちらの方が十字架で死ぬより、イエス様には楽な救いの方法でした。

それだけに、悪魔が仕掛けて来た誘惑は恐ろしい誘惑でした。それにどう答えるのか。それは正に、イエス様の「救い主」としての在り方を決定づけるものでした。

しかし、イエスは言われました。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある」(4)。「旧約『申命記』」8 章の言葉です。そこにはこうあります。「主が導かれたこの 40 年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。この 40 年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい」(申命記 8:2～5)。「出エジプト」の 40 年の荒野の旅において、イスラエルの民は激しい飢えを経験しました。その時、神は天からマナを降らせて、この民を養われました。飢えは現実でした。しかしその苦しみの中で、神は民を養われたのです。そして、それは「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたがたに知らせるためであった」(申命記 8:3)とあるのです。

「『人はパンだけで生きるのではなく…主の言葉によって生きる』のだから、飢えを耐えなさい」、そう言われたのではないのです。神は、人々の飢えをご存知でした。だからパンをお与えになりました。パンを与えただけではない。「この 40 年の間、あなたのまとう着物を古びず、足がはれることもなかった」(申命記 8:4)とあります。文字通り「着物が古びなかった」ということではありません。着物は取り替えたでしょう。でも振り返った時、「着物は古びなかった、足もはれなかった」と告白せざるを得ないような神の守り、現実的な神の守りがあったのです。(私は、以前お話ししましたが、神に導かれて養子に引き取った子を育てられたご夫妻が、「あの子を育てるのに何も困らなかった、神が全部して下さった」と言われた言葉を思い出します)。「飢え」はあった。しかしパンは与えられた。その「飢えの現実」と「神の養い」の中で、彼らは何を学ぶべきだったのか。子供の病気で苦しんだお母さんが、こう証ししています。「初めは『なぜうちの子をこんなひどい目にあわせるのですか』と神様に抗議したこともありました。でも辛い経験をしたおかげで、人間の力には限りがあること、生死は全て神様が握っておられること、最後に頼れるのは神様しかいないことを知りました」。イスラエルの人々も「人は自分の力だけでは生きられない、いや生きようとしてはいけない。父なる神に導かれて、支えられて、担われて生きるべきなのだ」、それを学ぶように期待されたのです。そして実際、「神が世話して下さる」、それが、彼らが経験したことでした。「パンだけで生きる」、それは神と生きようとしないことです。そうではなく「神への依存、神への信頼—{それは何より「神の戒め(言葉)」に対する信頼です。神の言葉に聞き従い、神と共に生きること}—それを第一とすること、そこに生きる道がある」、それを学ばなければならなかったのです。

教会の本棚の本に、こんな証しがありました。「台所には、空になった米びつを前にしながら、ひざまずき祈る父母の姿があった…あの台所の祈りがない日は 1 日もなかった。しかしわが家の大黒柱は、イエス様の十字架。決して折れることも、倒れることもなかった…イエス様が与えて下さった祝福は、私達が流した涙の分だけ、今我が家に溢れている」。色々な奇跡を見せられたのだと思います。「申命記」8 章 16 節にはこうあります。「それは、あなたを苦しめて試し、ついには幸福にするためであった」(申命記 8:16)。「神は、ついには私達を幸福にするために様々な取り扱いをもって私達を導いて行かれる」というのです。神と共に生きて行こうとすること、そこに私達にとって「ついには幸福に」という道があるのです。

しかし、この神への依存と信頼の関係がない時、そこにパンがあっても、「ついに幸福に」という道はないのです。ある神学者が日本の現状をこのように書いています—(古い情報ですが、言おうとしていることは分かって頂けると思います)。「戦後の日本は、政治も経済も科学技術も教育も産業も、すべて物質的な豊かさを求めて努力を続けて来た。今や一応の目標は達成し、経済大国となって繁栄を誇り、パンはあり余っている。しかし、大きな犠牲も払わなければならなかった。貴重な自然や環

境は破壊され、公害に生命を脅かされている。道徳や社会秩序は荒廃し、青少年は非行や暴力に走り、弱者は相変わらず泣かされている。そのうえ、貿易問題などによって日本への風当たりはますます強くなり、日本は国際的にも孤立してしまいそうである。また軍備の増強を強いられるなど、第三次世界大戦のうわさは現実味を増して、世界平和もようやく均衡が保たれているような状態である。神の言葉が重んじられて第一とされない時の悲劇は、現在私達が見る通りである」。「パンだけで生きようとすること」、それは決して私達を幸福に導く道ではない。今の様々な問題は、人が「パンだけで生きようとする」ところから、神との関係を見失っているところから、起こっているのではないでしょうか。そして何より、「パン」は私達に、最後の勝利、天国への凱旋、永遠の命の希望を与えません。永遠の命の希望がないということは、この世を生き抜いて行く希望がないということです。

だからイエス様は、人が神への依存と神への信頼の中で生きて行けるようにする、そして人々を「ついには幸福に」という道に導く、それこそがご自分の為すべき「救いの道」であることを確認されたのです。そして「石をパンにする」という悪魔の誘惑を拒否されたのです。それは、人々を神と結びつけるために、「十字架にかかる道を選び取る」ということを確認する時でもありました。このテストによってイエス様に、「十字架にかかる救い主」としての道が確かにされたのです。

2. 適用～神の御言葉と共に生きる

この個所から私達は何を学ぶのか。それは、私達の信仰生活にも、このイエス様の闘いがあるということです。「石をパンに」、それはイエス様の「救い主の在り方」を決定づける誘惑だったと申し上げました。一方、人間としてイエス様にとってこの誘惑は、「神が神なら、この石をパンに変えて与えてくれても良いではないか」という誘惑だったのではないかと思います。そのようにして神を疑わせる、そのような誘惑だったのではないでしょうか。イスラエルの民は、飢えと渇きの中で「主は私達の中におられるのか、おられないのか」(出エジプト 17:7)と叫んだのです。

私達はどうでしょうか。このように呟くことはないでしょうか。「なぜ神は、この石をパンに変えて下さらないのか」。つまり、問題に、不幸に、悲しみに、ぶつかった時、「神はなぜ、この問題を見事に解決して下さらないのか」と、神が自分にとって便利な神でないことに腹を立てることはないでしょうか。そこで不信仰になることはないでしょうか。イスラエルの民は、神によって奴隷の地から導き出されました。しかし荒野の放浪の中で、主に対する依存と信頼に生きることに何度も失敗するのです。「苦しい時の神離れ」と言葉を聞いたことがあります。神に背を向けてしまうのです。しかし主の方は、民を訓練しようとしておられたのです。神の民として、信仰者として、更に先に進ませようとしておられたのです。

家内が産後鬱で入院した時、家内は「ディリーブレッド」から神の語り掛けを聞いたようです。ある日のページに「地リス」という話がありました。筆者の家の近くに住んでいる地リスは、ゴルフ場のフェアウェイに穴を開けるので、ゴルフ場のトラクターが毒性のあるガスを地中に散布して、地リスを駆除してしまうのです。それを知って筆者はこう書いています。「出来ることなら、この可愛い動物を遠くへ逃がしたいと思います。巣穴をグチャグチャに壊して、強制移住させられれば、と思います。多分、彼らは怒るでしょうが、それは彼らのためになることです。同じようなことが、神についても言えます。私達の快適な暮らしは、神によって壊されることが時にはあるかも知れません。しかし、変化を強いる辛い状況の背後には、神の愛と、永遠につながる神の目的があります。神は残酷でもなければ、気まぐれでもありません。最終的には最善をなして下さいます(ローマ 8:28)。神は、私達が御子と同じ姿になり、天国で栄光ある喜びを永遠に享受するようにと望んでおられます。不変の愛で包んでくださるお方が起こされる変化を、恐れる必要があるでしょうか」。そしてそこには「ヨブ記」の御言葉がありました。「私は安らかな身であったが、神は私を打ち砕き…」(ヨブ 16:12)。家内はここを読んで「神様は愛のゆえに私を砕かれたのだわ」と言ったのです。その日から回復して行きました。「人生を導く 5 つの目的」の中にも次の言葉があります。「神があなたの人生に対して持っ

ておられる最終目標は、あなたが快適な生活を送ることではなく、あなたが人格的に成長することです。神の願いは、あなたが霊的に成長してキリストに似た者になることです」(リック・ウォレン)。私達が知っていることも、人生の試練や困難や悲しみが私達を成長させ、私達の信仰を成長させ、その信仰が、私達を様々な場面で支えてくれるような信仰へと変えられて行くということではないでしょうか。もちろん全てがそんな簡単に割り切れるわけではないでしょう。答が出ない、見つからない、どうしても納得出来ない、そんなことも信仰生活には沢山あります。しかし、私が申し上げたいのは、私達は、イスラエルの民が失敗したように、様々な試練や問題の中で神に背を向けてはならないということです。誘惑の中で、神の深い御旨を疑ってはならないということです。神への信頼、神への依存、そこに「ついには幸福に」という道があることを信じて、信仰生活を送って行きたいと願うのです。

神への信頼、神への依存、それは何より「神の言葉を慕い求める」という形になって現れるのではないでしょうか。「神の口から出る１つ１つのことばによる」(4)、この御言葉に生きようとすることだと思います。ある人がキリストに出会って、それがきっかけでキリスト者の経営する会社で働き始めました。ところが 30 代後半になった頃、奥さんが病気になり、治療費の都合でもっと給料の良い職を求めて転職をしました。しかし力仕事を続ける中で無理がたたって身体を壊してしまいました。45 歳の時、奥さんは亡くなりました。50 歳になった時には、その人も病に倒れてしまいました。妻を失い、仕事を失い、健康を失い、独り病院のベッドに横たわっていました。「もう自分の人生も限界ではないか」と思って失望の中にいたのです。しかし、彼はそのような中でも日毎のデボーションを続けていました。その中で次のことに目が開かれて行くのです。「目の前の事態がどうこういう以前に、自分は御言葉によって本当に養われて行かなければならない。そうでなければ本当の意味でクリスチャンとして生きて行けないのだ」。そして「これからは神の御言葉の約束にしがみついて生きて行こう」と思うのです。そんな中で彼が出会うのが「イザヤ書」の御言葉です。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る…それゆえ、主はあなたがたを恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は」(イザヤ書 30:15、18)。彼はこの言葉に信頼して、かつて勤めていたキリスト者が経営する会社に手紙を書くのです。そうしたら、その会社が、病み上がりの、まだフラフラしている彼を雇ってくれて、そこから彼の人生が開けて行くのです。私達も、御言葉にしがみつかなければならないと思います。そのようにして、「人はパンだけで生きるものではない」という信仰を生きて行きたいと願います。